

ミステリ読書案内

2021. 7. 21 発行元

第256号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

クリスチアナ・ブランドの代表作

イギリスの女流本格謎解きミステリ作家のクリスチアナ・ブランドを再び取り上げよう。古典的な「本格もの」が好みの人には是非読んでほしい作品である。【ブランドの『ベスト表』は第104号を参照のこと】

代表作を選ぶのは簡単

クリスチアナ・ブランドの代表作を選ぶのは簡単である。私の本棚で言うと、E・QやJ・D・Cなどの海外ミステリ黄金期の作品やそれに近い時期の作品が一番手前の取り出しやすい位置に並べてあるから。その上、ブランドは作品数が少ないのでそれほど悩むこともない。ということで、あっさり『はなれわざ』と『自宅にて急逝』、『ジェゼベルの死』に決まった。

いずれも戦後の作品ではあるも

の、イギリスの伝統的な本格謎解きミステリの形をしっかりと受け継いだもので、これからミステリの古典も読んでみたいと考えている若者にもぴったりの作品。

よく「海外の古いミステリの文は読みにくい」という声を聞くが、ブランドの文は具体的な出来事中心の率直な描き方なので理解しやすい方だと思う。難しい言い回しや難解な言葉があまり出てこないのでスムーズに読める。ただ、伏線だらけなので、そこは用心して読み進めなくてはならない。

No. 3 「ジェゼベルの死」

ハヤカワ・ポケット・ミステリの544番。1949年の作。長編第5作に当たる。

コックリル警部はロンドン出張中に脅迫状を受け取ったという素人役者のペピイからの訴えを聞いた。舞台公演で殺人が起きるといのである。コックリルが当日客席から見ていると、舞台上に11人の騎士が登場する場面で塔のバルコニーから女王に扮していたジェゼベルの死体が舞うように落ちてきた。ジェゼベルは首を絞められて殺されていた。ジェゼベルは男に寄生する悪評の高い人物だった。

コックリル警部はロンドン警視庁のチャールズワース警部とともに捜査に当たる。さて、どちらが先に真相に……。

No. 1 「はなれわざ」

現在はハヤカワ・ミステリ文庫の版が一番手に入りやすいようだ。(とは言ってもハヤカワの本は発行部数が少ないので古書店などでは手に入りにくいようだ) 私が持っているのは早川の『世界ミステリ全集』の第14巻。ジョイス・ポーターとパトリシア・モイーズと一緒に読む。巻だ。

1955年の作。長編第8作に当たる。コックリル警部はイタリアへの観光旅行ツアーに出発。主な舞台はサン・ホアン・エル・ピラータ島。島の領主がサン・ホアン大公。島独自の警察もある。30人くらいの旅行団だが関係者の範囲は狭い。女流作家、デザイナー、ピアニスト夫妻に独身女性。それに旅行会社の案内役など。島でのんびり過ごしているうちに、ある部屋で女性が刺殺されていることが判明。その際の各人の位置を示した図が提示される。一見、関係者の誰もが犯行不可能に見える状況に。

閉じられた世界であり、関係者どおしの間人間関係に恋愛がらみの部分があったりして、コックリルの捜査もゆっくり進んでいく。この辺りもたつき具合が、現在の若者には冗長に感じられ、読んでいる途中で投げ出される原因になるのかもしれないが、よくよく見てみると伏線やミスディレクション満載で、ああでもないこうでもない読者は右往左往することになる。実は大がかりな仕掛けがあるのだが、今となっては「よくあるパターン」のひとつと受け止められることがあるかもしれない。好みの問題だと思うが……。

No. 2 「自宅にて急逝」

ハヤカワ・ポケット・ミステリの492番。1947年の作。長編第4作に当たる。舞台は「白鳥の湖邸」と呼ばれる富豪サー・リチャードの邸宅。サー・リチャードが亡妻セラフィタを偲ぶハウス・パーティを開いた。集まってきた3人の孫とその関係者たち。その中で遺言書をどう書くかをめぐってのいざこざも起きる。サー・リチャードはことあるごとに「遺言状を書き換えるぞ」と回りを脅す。現在後妻に納まっているベラも遺産の行方については不満を持っていた。パーティは無事に終わったかのように見えたが……。次の日の朝になって、サー・リチャードは多量の薬物を注射され亡くなっている姿で発見された。孫で医者の子のフィリップの鞆の中から薬物が盗まれたようである。

コックリル警部が登場。サー・リチャードとは懇意にしていたのでさまざまな感情が入り混じる。邸宅という閉じられた空間で、なおかつ一族の中でのさまざまな要因が絡み合って事件を複雑にしていって。どの人物にも動機が存在することがわかってきて……さて、事件、犯人の決め手は何か？

ブランド独特のユーモアを含んだ筆致が思う存分発揮された一作とすることができるだろう。